

持続可能な漁村の“交流術” —ブルーツーリズムのこれまで、今、これから—

海と漁の体験研究所

代表 大 浦 佳 代

第 **576** 号
(第49巻 第12号)

編 集 一 般 財 団 法 人 東 京 水 産 振 興 会
発 行

「水産振興」発刊の趣旨

日本漁業は、沿岸、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待しておるので、その為には、それぞれの個別的な分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的な分析の徹底につとめるとともに、その総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層精進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかつてわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処に、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人 東京水産振興会
(題字は井野碩哉元会長)

目次

持続可能な漁村の「交流術」
—ブルーツーリズムのこれまで、今、これから—

第五七六号

はじめに……………1

一、日本のグリーンツーリズム……………3

 国の地方振興政策として登場……………3

 「グリーン」よりはるかに早かった「ブルー」……………5

二、転換期を迎えるブルーツーリズム……………16

 観光漁業や漁家民宿の衰退……………16

 新たな交流事業の始まり……………18

 東日本大震災がもたらした新たな交流……………28

三、漁村での交流事業の魅力と価値……………36

四、「教育」という新しいジャンルの登場……………39

 地域振興策としての教育旅行……………39

 漁村の高い教育力……………46

 水産業・漁村の多面的機能……………48

五、「食べさせる」から「学ばせる」プログラムへ……………51

六、これからの交流事業と漁村の持続……………60

 浅い海の世界を見守る目……………60

 漁業や漁業者の「多様性」が未来を拓く……………62

 「交流」がもつ意味……………64

時事余聞 編集後記

おほ
大 浦 佳 代
うら
か
よ

略歴

▽群馬県前橋市出身。東京海
洋大学修士課程修了。漁業、
農業、環境教育などが専門
のフリーライター・カメラ
マン。農山漁村の地域づく
り、起業、生活文化などを
おもに取材し執筆。

「月刊養殖ビジネス」（緑書
房）に「地域を元気にする
漁業体験のツボ」を連載中。
著書に「お蚕さまの四季」（群
馬県立日本絹の里）、「農業
者になるには」（共著）、「港
で働く人々」（日本沿岸域
学会出版・文化賞受賞）、「牧
場・農場で働く人々」（以
上ベリカん社）、近刊に「森
の学校・海の学校―アクト
イブ・ラーニングへの第一
歩」（共著、日本文教出版）
など。

持続可能な漁村の交流術

ーブルーツーリズムのこれまで、今、これからー

海と漁の体験研究所

代表 大 浦 佳 代

はじめに

世の中、体験型観光が花盛り。名所旧跡をただ見物するだけではなく、さまざまな体験メニューをとりそろえてお客を呼び込む観光スタイルは、もはやどこの観光地でも当たり前の時代だ。農林漁業体験（都市と農山漁村の交流事業）もこの一〇年ほどの間に一気に広がり、体験の種類も件数も急増。行政レベルで体験メニューの整備に力を入れ、インターネットのポータルサイトを設けるところも珍しくなくなっている。

全国の漁協の四分の一が漁業体験に取り組んでいる

二〇一三年の漁業センサスの「活性化の取組」のうち「都市との交流活動の取組」を見ると、「漁業体験を行った漁協数」は全国で三三四（漁協の総数は九三四）、年間の延べ参加人数は一二万六千人にのぼる。個人や法人の漁業経営体での実施を合わせると、もっと大きな数字になるだろう。少なくとも全国の漁協の四分の一が漁業体験に取り組んでいるという実態は、水産業全体として無視できない動きであることは間違いない。

本稿では、漁業体験を中心とした「都市と漁村の交流事業（ブルーツーリズム）」がテーマだ。各地の事例を紹介しつつ、その具体的な姿を見ていきたい。

ブルーツーリズムは大きくグリーンツーリズムの中に含まれることもあるが、まずは日本におけるグリーンツーリズムの歴史をひもといてみる。その上で、漁村でどのようにブルーツーリズムが生まれ発展してきたのかを見てみたい。

次に、社会の変化による交流事業の姿かたちの変遷について記していく。時代の流れとともに初期のブルーツーリズムは停滞し、新しい形に生まれ変わりつつある。その背景には、水産業の厳しい現状、体験型観光の隆盛や農山漁村での教育旅行の動きなど、さまざまな事情がある。漁村の交流事業は今まさに、一大転換期を迎えている感がある。全国各地の漁村での取り組みは、それぞれの地域の特性や背景によってじつに多彩だ。そこからは、今の日本の社会が透かし見えてとても興味深い。

一方、体験交流事業の参加者は、いったいなぜ何を求めて漁村にやってくるのだら

体験交流事業には金額には換算できない価値がある

うか。じつは漁村における体験交流事業は、これまであまり研究されていない分野なのだ。そのわけは、交流事業の価値を金額すなわち経営面からのみ評価しようとするためだ。たしかに多くの場合、交流事業が売り上げる額は水産業全体の生産額からみるとささやかなものだ。しかし、体験交流事業には金額には換算できない価値があることは、各地の事例を見ればあきらかだ。

本稿では、体験交流に訪れる人びとの「ニーズ」にも光を当て、漁村ならではの体験事業の魅力や価値にも迫ってみたい。

最後に、今後の都市漁村交流のあり方についても少し考えてみたい。都市のニーズと漁村の事情がうまくかみあい、両者にとって「幸せ」な新しいブルーツーリズムの形、すなわち持続可能な漁村そして豊かな日本の未来のための「交流術」を探ってみよう。

なお、本稿で紹介する交流事業の事例は、海に最も近づく漁業体験の例を選んだ。ビビッドに交流の意味や価値を評価できると考えたためだ。

一．日本のグリーンツーリズム

国の地方振興政策として登場

ちよつとややこしいのだが、「グリーンツーリズム」という言葉は、都市と漁村の

交流「ブルーツーリズム」に対応して、狭義に都市と農山村の交流をさす場合もあるが、農山漁村での交流をひとまとめに「グリーンツーリズム」と呼ぶこともある。

日本で「グリーンツーリズム」という言葉が初めて使われたのは、四半世紀近く前の一九九二年のことだ。農業基本法にかわる「新しい食料・農業・農村政策の方向」において、ヨーロッパのツーリズムをモデルに、農山漁村の振興策として登場した。三年後には農山漁村が都市住民を受け入れるための環境整備を目的とした「農山漁村余暇法」が施行され、農林漁業体験民宿の登録制度の運用なども始められた。

しかし、国が政策として提唱したグリーンツーリズムは、工場誘致やレジャー開発にかわる地方の振興策という位置づけであり、国の交付金で公園や遊歩道、交流施設などハード整備を進めるものが目立った。しかも、経済的に余裕のある都市住民が「開発の遅れた田舎」の自然の中で余暇を楽しむという色合いも含んでいたことから、都市と農山漁村の対等な関係性を欠き、人と人との交流は生まれにくいという批判もあつた。

ところがほぼ同じ時期、国の政策とはまったく別に大分県安心院町では、農村に当たり前にある里山の自然や田畑、くらしの文化を観光資源として生かした農家民泊の取り組みを始めた。一九九六年に数軒の農家と町が、「一回泊まれば遠い親戚、十回泊まれば本当の親戚」をキャッチフレーズにしたグリーンツーリズム研究会を発足。庭先で鶏の卵を拾い、裏山のシイタケや畑の野菜を収穫して、囲炉裏の火にあたりな

大分県安心院町で始まった農家民泊の取り組み

がら農家のおじちゃんおばちゃんと一緒に家庭料理をいただく。そんな心の通い合う交流を生み出したのだ。このツーリズムは「安心院方式」と呼ばれ、国の政策とは異なる都市農村交流のモデルとして脚光を浴びることになる。

やがて安心院方式の農家民泊は、各地に飛び火し広がっていった。ところがその結果、旅館業法や食品衛生法などに抵触するとして問題視されるように。やがて国は安心院方式の交流事業の価値を認め、二〇〇三年に旅館業法などの改正や規制緩和が行われた。民間から生まれたツーリズムが国の法を変えた形だ。

このような都市と農山漁村の交流は「日本型グリーンツーリズム」と呼ばれ、規制緩和とともに全国各地に浸透。現在の農家民泊、農業体験などの交流事業につながっている。

「グリーン」よりはるかに早かった「ブルー」

しかし漁村に目を転ずれば、わざわざ横文字の看板をあげるまでもなく、じつは農村よりもずっと早く一九六〇年代後半から、地域の資源を生かした漁家民宿や観光漁業が芽生えていたのだ。しかも、国の補助金や政策とは無関係に、漁村内から自然に発生していることは注目に値する。

たとえば、一九六七年に道路が開通するまで海路しか交通手段がなく、陸の孤島

民間から生まれたツーリズムが国の法を変えた形

各種の観光漁業も一九七〇年ごろから自然発生的に生まれていく

だった福井県若狭町の常神半島^{みこ}神子地区では、釣り人に渡しや宿の便宜をはかったのが発展し、一九六五年に七戸が民宿を始めた。やがて半島・離島ブームの追い風もあり、数年後には集落三六戸のうち二四戸が民宿を経営するまでになる。そのうちに、親しくなった宿泊常連客をサービスとして漁船に寄せたり、小型定置網の体験をさせたりする体験事業の萌芽がぼつぼつと出始める（その後の展開は事例八として後述する）。全国各地の漁村でも一九七〇年代に到来した民宿ブームに乗って、数多くの漁家民宿が開業。海水浴や釣りなど、海のレジャーに訪れた人たちを新鮮な魚介や郷土料理でもてなした。安心院のように、常連客をまるで親戚のようにあたたかく受け入れた地域や民宿も多かっただろう。

一方、地びき網や底びき網など各種の観光漁業も、ほぼ同じ時期の一九七〇年ごろから自然発生的に生まれている。漁師が知人の要望で漁船に乗せ、水揚げした魚介類を船上で料理して食べさせたのが野趣あふれる宴会の趣向として広がり、観光事業として整備されていった事例もよく見られる。一九七〇年代から平成初期にかけて、慰安旅行や親睦会、接待などの団体客に支えられて、漁業体験は多に発展していった。具体的な事例を三つ紹介しよう。

事例一…岡山県備前市日生町^{ひなせ}

瀬戸内海に面した日生は「日生千軒漁師町」といわれ、古くから漁業で栄えて

きた。島々が織りなす入り組んだ沿岸は、遠浅で穏やかな好漁場だ。昭和三十年ごろまでは「つぼ網」と呼ばれる小型定置網漁がさかんだったが、しだいにカキの養殖にとつてかわり、現在ではカキの水揚げ高が全体の八割以上を占める。名物は漁協の直売所「五味の市」で、春から秋にかけては小型底びき網のおかみさんたちが小魚やエビなどをこまごまと並べ、冬には養殖カキの売り場がひしめく。日生で観光底びき網漁が始まったのは一九七〇年ごろ。日生諸島の頭島^{かしら}で今も観光底びき網を行っている中本喜庸さんの父親が、知人から会社の慰安旅行にと頼まれたのが始まりだという。漁船に客を乗せて網をひき、とれたての魚介を船上で刺身や煮つけにして提供。さらに持ち帰りも自由にしたところ、おいしさと珍しさから口コミで評判が広がり、やがて中本さん一軒では対応しきれなくなってきた。そこで漁師仲間と客を融通するようになり、一時期は二〇軒以上が観光底びき網を行っていたという。

中本さんは一九八七年に就業して父親から体験観光を任せられたが、「その頃には小型船舶登録、保険加入、統一料金などのシステムができあがっていて、島の産業としてすっかり定着していました」という。集客のピークはそこから一〇年ぐらいで、四月から二月までの土日は予約でびっしり埋まったそうだ。

ちなみに日生の小型底びき網体験の対象は団体向け。バブルの時代には「接待なので値の張るワタリガニやクルマエビを調達してほしい」などといった注文も



日生名物、「五味の市」。冬にはカキの店がひしめく



頭島の漁港での、中本さん夫妻の浜売り(直売)の店。底びき網漁の漁獲はすべて浜売りで売り切る



底びき網漁の、魚、エビ、イカ、シャコなど多彩な漁獲

あつたそうだ。売り上げは年間四〇〇万円以上にのぼっただけでなく、冬に営む養殖カキの注文販売にも直結して、交流の効果は大きかったという。日生の観光漁業は、夏場に稼げる大事な副業だったのだ。

中林地区では宅地開発が進むが、海沿いには漁村の面影が今なお濃い。漁港の先には二キロにわたって「日本の渚百選」の砂浜が続き、中林漁協はここで一九七九年から観光地びき網を経営している。きっかけは第二次オイルショック。漁船漁業の苦境を観光で補おうと始められた。これを力強く支えたのが漁協女性部だった。収益を上げるには調理サービスの充実が不可欠だと、女性たちは先行地域に視察に行ったり講習を受けたりなど、積極的に観光事業の基礎を固めたという。徳島市から車で四〇分の利便性に本州四国連絡橋開通、アウトドアブームも追い風となり、観光地びき網は大ヒット。一九八〇年代のピーク時の来客数は年間一万八千人、売上高は五千万円にのぼり、オイルショック後も中林の漁家の重要な副収入源として続けられてきた。

その収益の分配法には知恵がたまっている。漁船を使う施網は、漁協組合員を漁業種別に三班に分け順番に当番日を回す。賃料は一網五万三千円で、分配方法は各班に委ねられている。一方の調理は漁協女性部が一網二万五千円で受けるが、こちらは当番制ではなく都合の合う人が集まるシステム。手間賃の配当はなく、当日の手当ではお昼の仕出し弁当のみ。収益は傷害保険と漁業者年金の加入、親睦旅行の積立に当てられる。「これが最善の方法。漁師の奥さんは家の仕事の時間が不規則で当番制はムリ。時間給だと不公平になる」と女性たちはいう。

この事業からは、地域の漁家女性たち間の交流という副産物も生まれた。それ以前は漁業種が違っていると交流も少なかったそうで、調理の仕事や旅行を通じて女性たちの親睦が深まり、防災力が高まったという話も聞かれた。



白砂青松の砂浜で、地びき網体験を楽しむ団体



出港する網船。2隻の間の網には、あらかじめ活魚やおもちゃのカプセルなどの“漁獲”が仕込まれている



調理部門を支える漁協女性部。高齢の女性の生きがいにもつながっている

事例三…熊本県葦北郡葦北町

八代海に面した熊本県葦北町には、帆に受ける風の力を利用した底びき網漁の一種、打瀬網漁が現存している。かつて、東京湾や瀬戸内海など浅い海でふつうに見られた打瀬船だが、沿岸の開発や動力化で昭和三十年代に姿を消し、今では鹿児島県出水、北海道の野付半島と葦北の三か所に残るのみだ。中でも通年操業をしているのは葦北のみ。高さ一〇メートル余りのマストを四本そびえ立てた木造船が一〇数隻も並ぶ漁港の風景は、まるで異国のような趣だ。

葦北で打瀬船の観光漁業が始められたのは、一九八〇年前後。春先や秋口の漁獲が少ない時期の収入を補おうと、楠山政徳さんら四人が始めたのが最初だ。漁が少ないとはいえ、客に食べさせるには十分すぎる。七枚の帆を揚げた木造船でクルーズしながら海の幸を堪能できる観光打瀬は、たちまち話題になった。

「毎年三倍三倍でお客さんが増えて、バブル期には年間八〇日も観光で出ましたよ」と、楠山さん。その活況ぶりに他の打瀬船も参加。漁協の中に観光組合を作り、葦北町の補助事業で各船のトイレと、漁港に待合室も整備した。

体験は約三時間。機走で沖に向かい、漁場に着いたらエンジンを止めて帆を展開。風の強弱に合わせて帆をこまめに上げ下げし、時速二キロ弱でゆったり風流されつつ網をひいていく。エンジン音がない静かな世界。木造船は安定がよく波あたりも柔らかい。とてもぜいたくなクルーズだ。



風を受けて網をひく、壮麗な打瀬船。国の文化財に指定されてもおかしくない伝統的な漁船と漁法だ



網は1時間ほどで上げる



漁獲のアシアカエビを船上で塩焼きにしてお客に提供

観光打瀬は定員二名までの貸し切りが基本で、乗船料は四三二〇〇円。別料金の料理は一〇五〇〇円と二二〇〇〇円の二コースだが、アシアカエビの塩焼き、小エビの炊き込みご飯、煮魚や焼き魚など前日に刺し網漁で用意した魚介もあわせ、食べきれないほどの海の幸が並ぶ。「お客さんの七割は熊本県内から。繰り返し来てもらうには、漁法や船の話、海の話、景色の案内などの会話が大事です」と楠山さん。接客術によって、各船につく顧客の数が決まるといふ。

料理重視で団体客対象という特徴

以上の三つは一九七〇年代に生まれた観光漁業だ。中林の地びき網は本業を補う目的で純粹に観光向けとして始められた漁業だが、他の二つは本業の操業をそのまま観光に利用して、副業を得ている事例だ。いずれも料理重視で団体客対象なのが特徴。最盛期には、年間収入の中に無視できないウェイトを占めていたこともうかがわれる。また中林地区では、観光漁業は地域ビジネスとして運営され、協同と平等の精神のもと、漁村コミュニティの調和にも大きな役割を果たしてきたことも注目される。

芦北の打瀬船漁体験は、単なる漁業体験の枠には収まらず、伝統的な漁法や文化の体験という性質もあわせ持っている。しかし観光漁業の内容は、やはり団体向けの食事重視で、集客はほぼ県内という点でも他の事例とあまり大きな違いはないようだ。

このように、漁村ではグリーンツーリズムの発祥より早く、漁業という生業を観光資源としていかし副収入を得る交流事業が盛んに行われていたのだ。

二・ 転換期を迎えるブルーツーリズム

観光漁業や漁家民宿の衰退

一九七〇年代以降、各地で盛んだったブルーツーリズムだが、やがて景気の冷え込み、レジャーの多様化、テーマパークの増加などさまざまな社会の変化によって、

二〇年ほど前から少しずつ勢いを失っていく。たとえば、漁家民宿は大きく数を減らしていく。愛知県南知多町の日間賀島では、一九八〇年ごろ八〇軒以上あった民宿は、およそ半分に淘汰されていった。日間賀島は漁業と観光を組み合わせた成功事例として知られているが、その日間賀島でも、漁業のかたわら営業していた漁家民宿はほぼ姿を消した。現在残っているおよそ四〇軒は、施設を新たに建て替え、地魚料理を目玉にした料理旅館的な営業形態に変わっている。

成功事例で有名な日間賀島でも
漁家民宿は衰退

宴会や団体旅行の文化に支えられて盛んだった観光漁業も、同様に衰えていく。日生の観光底びき網は、かつて二〇軒以上の経営体が行っていたが、今では実質五軒ほどしか残っていない。底びき網漁の経営体自体が減ったこともあるが、それ以上に集客が落ちたのが大きな要因だ。仲間うちでもっとも顧客が多い中本さんでさえ、今年の予約件数は五件ほどだったという。一五年ほど前には、頭島の民宿と手を組んで修学旅行の学習体験（食事はつかないコース、漁獲は持ち帰って民宿で食べる）を提供した時期があったが、最近では民宿の経営難から廃業や高齢化が進み、修学旅行の受け入れもできなくなっている。

また一〇年ほど前から、漁協のHPに頭島支所を申し込み窓口にした漁業体験PRのページを設けているが、昨年から食事がつかない学習体験コースのみの案内に変更。それでも、問い合わせはほとんどないそうだ。

中林の観光地びき網も年々減少して、このところ年間の網数は二〇そこそこ。県南部に行政の支援で教育旅行や体験学習をターゲットにした事業が生まれた影響もあるのでは、と漁師たちは話している（南阿波よくばり体験推進協議会のことだと推測される）。また、調理を支える女性たちも高齢化が進み、継続が心配されている。

芦北の観光打瀬網も平成に入るところから客足が衰え、存続が危ぶまれている。漁協や町では、団体貸し切りだけではなく春と秋に一月ずつ乗り合いの期間を設けて乗船しやすくしたり、関西圏からの修学旅行の誘致、大手旅行会社や温泉旅館と手を組んだツアーを手がけたりなど、あの手この手を尽くしているが、経営は楽ではないという。楠山さんは「ここ数年は漁獲そのものが減っていて、食事でお客さんを十分に満足させられなくなっているのも悩みの種です」と顔を曇らせる。後継者もわずかで、漁船数は年々確実に減っているのが現状だ。

新たな交流事業の始まり

各地の事例から、交流事業の形態の変遷と年代をおおまかではあるが表にしてみた。地域や事例によって差異があるので、年代は多少かぶっている。

時期と年代	都市農山漁村交流の動き
第一期…一九六五～七五ごろ	宴会や親睦会から観光漁業が発生 離島半島ブーム、民宿ブームで漁家民宿が急増
第二期…一九七五～一九九五ごろ	観光漁業の体制の整備が進む 宴会など団体客に支えられた観光漁業の最盛期
第三期…一九九〇～二〇〇五ごろ	社会の変化で観光漁業は停滞、民宿も減少 農村で日本型グリーンツーリズムが生まれ定着
第四期…二〇〇〇年ごろ～現在	体験型観光の興隆 教育旅行、体験学習へのシフト
これから	食だけではなくプログラム重視の時代へ？

ブルーツーリズムの変遷

足踏みをしていた漁村での交流事業も、二〇〇〇年ごろから息を吹き返す

興味深いのは、漁村での交流事業の停滞期に、農村では安心院の民泊のような日本型グリーンツーリズムが生まれて全国に広がり、定着していることだ。農山漁村における交流事業のあり方が、確実に変わってきたことがうかがえる。その流れに突き動かされるように、足踏みをしていた漁村での交流事業も、二〇〇〇年ごろから少しずつ息を吹き返し始める。

そのことは、二〇〇八年の漁業センサスで初めて「漁業体験を行った漁協数」および「参加者」という項目が登場すること、そして五年後の二〇一三年の漁業センサス

漁村をあげて地域の振興策として取り組む例の増加

では前回よりも三四漁協五三四二人増加し、増加の傾向にあることからもうかがえる。注意しなくてはいけないのは、二〇〇〇年ごろから息を吹き返した漁村の交流事業は、それまでのものとは時代の背景も内容も大きく異なっているという点だ。第二期の多くの交流事業は個々の漁家の「割りのいい副業」として取り組まれていたが、第四期では全国的な体験型観光の盛り上がりや、学校の教育旅行・体験学習の農山漁村での受け入れといった新たな流れに乗って、個々の漁業者の取り組みだけではなく漁村をあげて地域の振興策として取り組まれる例も多くなっているのだ。そしてその背景には、やむにやまらず本業以外の道を探らずにいられなくなった漁村の苦しい事情が横たわっている。その事情とは、水産資源の枯渇、魚価の低迷、燃料や資材の高騰、漁業者の高齢化と後継者不足など、漁業を取り巻く厳しい環境であることはいうまでもない。かつての観光漁業とは異なる、体験型観光の流れに沿って漁村の存続を図ろうとする二つの事例を紹介しよう。

事例四・大阪府泉南郡田尻町

関西空港の対岸の田尻漁協は、海を活用した観光事業の成功事例として名高い。かつて田尻の海は面積あたりの漁獲高で日本一を誇ったというが、関西の関連施設用地として岸から沖合へ四〇〇メートル幅を埋め立てた。漁場の半分が失われ

が、だれもが驚いたことに、漁獲量の減少は半分にとどまらず、一割以下に激減したのだ。漁協の広報担当の森下耕治さんは「ほんま人間の知恵は浅はかなもんです。埋めたのは膝ぐらいの浅場。でも生き物には浅い海が必要な場所だったでしょう」と話す。

漁獲が一割以下に減った海を前に、それでも漁師たちは「この海で生きていくしかない」と腹をくくった。その方法として着目したのが、マリンレジャーを取り込んだ交流事業だ。二〇〇〇年までに漁協は、マリーナの陸上施設、水上バイクの艇庫、BBQ施設、釣り堀などを開業。運営はすべて業者への委託だ。また、魚市場の仲買業者、野菜、惣菜、雑貨など四〇店舗を集めて日曜朝市も開催、観光名所として定着させた。

漁業体験は、朝市の客の「魚をとるところが見たい」という声がかきつけ。経営コンサルタントを入れてプランを練り、接客術や安全管理も学んだ。体験の漁は刺し網とマダコねらいのカゴ漁だ。関空に離着陸する飛行機を間近に見るクルーズ、とれた魚介や注文食材（地産にこだわらない）のBBQが人気を呼び多くの利用がある。

ただし体験事業は赤字。正組合員の一六人がベアを組んで輪番で回す漁業体験の日当が、採算度外視の一人二万円だからだ。体験事業による一人あたりの収入は年間一五〇万円になる。じつはこれ、他のマリレジャー事業である収益の



漁港近くの海上釣り堀。橋を雨除けにうまく利用している



関空や都会の風景を海から眺めるクルーズ



漁協の建物は海洋交流センターを兼ねる。中に体験事業の受付窓口がある

組合員への分配というカラクリ。この基礎収入のおかげで後継者のほか外からの就業者も入って田尻漁協は若返っているのだ。

森下さんには今、心配なことがある。それは漁獲量が減り続けていることだ。「体験の仕事は交流の楽しみよりも水揚げゼロの不安のほうが大きい」といい、体験のカゴにはあらかじめ「保険」のタコを仕込んでいた。

事例五・高知県中土佐町上ノ加江地区

上ノ加江漁協は、漁村コミュニティの拠りどころである漁協を単協で残したいという地域の願いを体験交流事業にたくし、独立を守っている。「昨年集客数は一五〇〇人を超え、最近では体験事業の売上は水揚げ金額とほぼ同額です」と、正職員の松丸梨佳さんはいう。

体験型観光を進める高知県の誘いに上ノ加江が乗ったのは一二年前。背景には、漁師の高齢化や魚価の低迷などによる漁協存続の危機があった。失敗すれば後がない。導入は慎重に行い、最初の二年は県の補助を受けてプログラム作りや接客の修練、モニターツアーの実施などに当った。試行錯誤の末、①錘（小石）のロープがけ、②漁業体験（かご漁、イセエビねらいの刺し網）、③木造船のろ漕ぎ体験、④とれた魚の昼食、というプログラムが完成。担当する漁師の「お話」（漁の話、天候、海の話、漁村の民俗など）にも磨きをかけた。

この事例でとくに目を引くのは、体験専用漁場を定め一般の操業を禁じたこと。体験専用漁場はアマモ場とガラモ場が混じる前浜の湾で、魚介類が多様で豊富。藻場は産卵場や稚魚の生息場所でもあり、資源管理の点からもすぐれた決断だ。「港に近く、季節風の影響もないので安全で、通年の受け入れも可能です」と松丸さん。当初、漁業者から不満の声もあがったが、やがて「漁協を守るため」と納得してくれたという。

体験指導も「漁協存続のため」と、一〇人ほどの漁師が遊漁船業務主任者講習を自費で受け、進んで漁船を遊漁船登録した人もいる。また、食事の準備は漁協女性部が交代で腕をふるう。日当は一律三千円で一人当たり年間一〇万円ほどにしかないが、お客との交流にもやりがいを感じているという。

ここ数年は「個人旅行者だけでは限界だ」と気を引き締め、新たに学校向けプランを用意。高知市内の小中学校への営業をていねいに行い、今では毎年安定して一千人超の集客を得ているという。



2007年に、国の補助のほか自己資金1千万円を投じて建てた交流施設。調理室と、食事や室内プログラムができる広間を備える



ろ漕ぎ体験の様子。体験事業用の木造和船も漁協であつらえた



昭和前期の上ノ加江の写真。湾奥は砂浜がコンクリート護岸になったが、たずまいは今も変わらない。この湾内の水深3mていどの藻場が体験専用漁場だ

漁協が運営主体となった交流事業の事例

事例四と五はともに、体験型観光の盛り上がりに乗って観光客を呼び込み、漁村の持続を図ろうとしている事例だ。どちらも漁協が運営主体となって交流事業に取り組んでいるが、背景の事情が異なるため向かう方向も違ったものになっている。しかし、今の社会の姿を投影している点では共通しているだろう。

大阪の田尻は、埋め立てによる環境変化で漁獲量が一割以下に減ってしまった海を捨てて陸にあがるのではなく、逆転の発想で海のレジャーの基地化や日曜朝市開催で市民の楽しみの場に仕立て直している。その手腕は見事だ。しかし、漁獲がなくては漁業体験は成り立たず、今後の展開に不安もある。とはいえ、これほど柔軟な発想ができる田尻なら、「魚介がとれなくなった海」を題材に、海の環境学習プログラムを作りあげることが難なくやれそうな気もする。

高知の上ノ加江は、資源の管理もしながら伝統的な漁村のコミュニティを維持している非常にすぐれた取り組みで、漁村における交流事業のひとつのモデルになるだろう。現在、体験を指導する漁師たちの高齢化が課題で、和船漕ぎは漁師以外にも人材を求めるなど努力がなされている。しかし一方で、高知県では一県一漁協への統合が進められていると聞く。小さな漁村のオリジナリティーが尊重され残されることを祈るばかりだ。

東日本大震災がもたらした新たな交流

東日本大震災の被災地にも、これまでにはなかった新しい交流事業が数多く生まれている。被災地沿岸は津波ですべてを失ったことで、いやもおうもなく「支援」を通して外の人たちと太い交流を結んだが、東北の事例は、漁村社会の扉を外に向かつて開くことによる活性化の可能性がどの地域にも秘められていることを示唆している。

震災が漁村社会にもたらした大きな変化のひとつに、「外部の人間との交流」がある。わたし自身もそうなのだが、震災の直後からじつに多彩で多様な団体や個人が、小さな漁村のすみずみまで繰り返しボランティアなどで訪れ、前代未聞の「外との交流」が巻き起こった。

ボランティアの人びとの漁村での作業は、最初は浜や家屋の片づけに始まり、それが一段落すると、ワカメ養殖の準備作業、種つけと収穫の手伝い、やがてカキやホタテの養殖準備の手伝いへと、漁業そのものの作業に移っていった。この「漁業ボラ」は都会から来た人びとには大人気で、希望者が多かった。「ワカメやカキ、ホタテはこんなふうに育てられていたのか、漁業ってこんな仕事なのか」という発見は、だれの目にもとても興味深く新鮮にうつった。また、震災があった海でたくましく生き続ける漁業者たちの生き方も、ボランティアの人びとの共感呼んだ。収穫期に入ると新鮮な海産物もお礼としてふるまわれ、これもまた彼らの心がちりつかんだのだ。

大震災後の東北では、はからずもいまだかつてない大規模な「漁業体験」が繰り返られたのだと、わたしは思っている。それまで民宿など一部の層を除き、外部には閉ざされがちだった小さな漁村のひとつひとつに、外の人間との交流が「絆」という名のもとに結ばれたことは、漁村社会にとって大きな変化だったはずだ。

こうした交流によって、何気ない漁村の風景だけでなく漁業の作業さえもが観光資源になると気づいた人たちは多かった。また、被災地支援に訪れた人びとも、復興の足がかりとして観光事業を始めるよう勧め、HPなどの広報宣伝、プログラム作りなどで後押しをした。その上、観光目的だけではなくボランティア活動から発展した有料の企業研修などのニーズが寄せられたことも特筆すべきだろう。

東北沿岸に新しく生まれた交流事業はさまざまあるが、中でも若い漁業者が地域の将来のために興じた事例を二つ紹介しよう。

事例六・宮城県南三陸町歌津

東日本大震災後、後継者世代が海で仕事を続けられるようにと、養殖体験、釣り体験、水産物のネット販売を始めた若者がいる。旧歌津町泊浜で両親とワカメ養殖を営む高橋直哉さんだ。

体験交流事業を始めたきっかけは、ボランティアへのお礼。漁船でクルーズしながら手軽な釣りも楽しんでもらったところ「これが驚くほど好評。一日がかり

被災地の漁業ボランティアは都会から来た人びとに大人気

風景だけでなく漁業の作業さえもが観光資源になる

ではない二時間ほどの釣りにニーズがあるとは、目ウロコでした」と高橋さん。ポランティアの人びとのワカメへの反応もまた驚きだった。「お湯の中でワカメが緑色に変ることに味にも感動するんです」。漁村では当たり前前のことが観光資源になると高橋さんは直感。一二年五月に個人で釣りと養殖体験の看板を上げた。これを次々にマスコミが紹介。反響は思いがけないほど大きく、一人では対応しきれなくなった。そこで、同じ浜で養殖や遊漁を営む同級生と三人で体験交流事業「海しよくにん」を立ち上げたのだ。

この交流事業はネット販売にも直結している。高橋さんは一二年にワカメの加工品などのネットショップも立ち上げたが、期待に反してポランティアや漁業体験で交流した人からしか注文が入らず、「この浜と海での体験と交流が何より大事なんだ」と悟ったという。

現在、約二時間の釣り体験は四千元〜六千元。養殖体験は八名からで、コースによつて一人二千元〜三千元。漁場見学のみと収穫体験とがあり、収穫体験は三、四月がワカメ、五月〜一〇月はホタテになる。ワカメは港に戻つてからしゃぶしゃぶで食べさせ、塩蔵ワカメ作りの体験もつく。去年は体験だけで三〇〇万円以上を売り上げた。

海しよくにんは、観光による町の復興にも寄与している。もともと南三陸町は民泊事業と教育旅行に力を入れていたが、震災の翌年から一般の観光のほか教育

旅行の受け入れも再開。海しよくにんは、海の体験の貴重な受け皿になっている。

けれども高橋さんたちは「この事業の目的は、後継者世代が浜で仕事ができるようになること」だと話す。というのも、泊浜では漁場の再配分やカキ養殖復旧の遅れなどから、後継者世代が浜で働けるのは三、四月のワカメの繁忙期のみ。他の時期は建築土木などの仕事に就かざるをえないのだ。しかし建築土木の仕事が多いのもあと数年。好きな海の仕事を作り出して浜にとどまり、地元の家や漁村コミュニティを守っていく、高橋さんたちの思いはそこにある。



高橋直哉さん（右）と、一緒に海しよくにんの事業を行っている同級生の高橋芳喜さん



泊浜のワカメ出荷の様子（2012年3月）



泊浜では、江戸時代から続く「契約会」という互助会が自治を行う。古くからの漁村コミュニティが色濃く残っているのだ。木造船の船大工も現存し、震災後は7隻の注文があった

南三陸町の「海しよくにん」は、漁業を資源とした体験交流事業を新しく興し、若い世代が海の仕事を続けながら、漁業や漁村のコミュニティを守っていく決意を形にしたものだ。彼らの事業は被災地に明るい光を灯すだけでなく、他の地域にもあてはまる漁村ビジネスのひとつの切り口を見せているように思う。

もうひとつの事例は、交流の目的が他とはちよつと変わっている陸前高田市の広田湾遊漁船組合だ。この組合は、漁業体験で漁業に多くの人に興味関心をもってもらい、漁村で働く新規就業者のタマゴを募ることを目的に取り組んでいる。

事例七…岩手県陸前高田市

陸前高田市の米崎地区でカキの養殖をしている佐々木学さんは一四年四月、「広田湾奥遊漁船組合」を発足させた。これは釣り客相手の一般的な遊漁ではなく、養殖業を営む七人が養殖の現場で漁業体験を受け入れる事業だ。組合長は震災前から地元中学校の体験学習を担当してきたベテラン。事務局は佐々木さんが務める。

米崎の養殖業者は震災前すでに淘汰が進んでいたこともあり、一軒減っただけで九軒が残った。しかし佐々木さんが思いをはせるのは一〇年以上先の未来だ。「後継者がいるのは三軒だけで、今のままなら一〇年後には九軒が五軒になりその後はもつと減るのは確実です。今回のような災害時には、仲間がいないと漁業



佐々木さんが使っているカキの加工施設。直接販売も行っている



佐々木学さん。3人の子どものお父さんでもある

も漁村も復興できないことがよくわかりました」と佐々木さんはいう。

震災前、この地域には漁業体験などの交流事業は存在しなかった。しかし震災後、たくさんのボランティアが浜にやってきた。ボランティアの人たちは初めて体験する養殖の現場に興味津々で、海とともに生きる漁師の姿にも深く共感した。やがて有料ボランティアや企業研修の申し込みが次々と寄せられるようになる。

そこで佐々木さんは、二〇一三年に個人で漁業体験の事業「浜の繋がりズム」を立ち上げた。海から奇跡の一本松やかさ上げ工事を眺める漁船クルーズ、丸太いかだの上を歩く養殖漁場の見学と作業体験、これにホタテやカキの試食をつけて約三時間一人四千円のプログラムだ。

やがて個人で引き受けるには申し込みが多くなりすぎたことと、地域全体で漁業就業者の確保を考えたいと、佐々木さんが提案して広田湾遊漁船組合を組織。体験の内容は「浜の繋がりズム」のプログラムを踏襲しているが、受け入れは団体のみ。いまのところ、月平均三回ほど受け入れているという。

「二本松で有名になった陸前高田と築地トップブランドの広田湾産カキを結びつけ、多くの人を呼び込みたい。そしてその中から漁師になってくれる人が現れることを期待して活動しています」と、佐々木さんは話している。

被災地で生まれた交流事業は、漁業者個人や数名のグループと外部の支援団体などが直接結びついて運営されているものが多い。現在のところ、ほとんどの地域で行政や観光協会などが実態の把握もコントロールもしていないのも特徴だ。気仙沼市の唐桑町観光協会の担当者は「口をはさむ権限がない」といいつつ、「価格設定はそれぞれで、安全管理の研修なども行っていないようなので、心配な部分もある」と話している。

震災から間もなく五年を迎えるが、交流の形も漁村社会にもたらず影響も変化を続けている。今後の動向を継続して見守っていきたいテーマだ。

三、漁村での交流事業の魅力と価値

漁業現場の面白さ、漁師の生き方や漁村の文化に多くの人がひきつけられた

東北の二つの事例は、ボランティアを通じて思いがけず出会った漁業の現場の面白さ、漁師の生き方や漁村の文化に、多くの人がひきつけられたことで生まれた交流事業だ。

これまで漁村における交流事業は、漁村の地域活性や漁業経営の面からのみ語られることが多かった。しかし、漁村や漁業の体験に人が集まるのは、そこに都市住民や消費者のニーズがあり、体験事業に大きな魅力と価値があるからに他ならない。これからの都市漁村交流事業は、都市のニーズを上手にキャッチし、その魅力と価値を十分に自認した上で自信をもって取り組まれるべきだろう。そうすれば、都市と漁村の交流はより深まり、体験交流事業をさらなる高みへと進めることができるはずだ。

さてそれでは、そもそも漁村や漁業の体験のいったい何が面白いのだろうか？ なぜ人は漁村での交流体験に魅了されるのだろうか。その答えは、端的にいってしまえば「本能的にガツーンと響く体験だから」だと、わたしは思っている。

農業は身近に田畑を目にしたりふれたりする機会が多く、また、たいいていの学校では校庭の一角や近隣の農地で野菜やコメを育てる体験学習を行っている。それにひきかえ漁業の現場は海の上で、一般に目にしたりふれたりする機会はほとんどない。密漁の警戒から、うかつに近づくことが許されない土地もある。漁港の産地市場は衛生管理の面から、関係者以外お断りのところが増えている。一般の人びとにとって、漁業は未知なる不思議の世界なのだ。

それゆえに、漁船に乗って海に出る体験だけでも、非日常的で心をわくわく躍らせる。ましてや漁獲となると、狩猟本能にじかに響く強いインパクトがある。動物である人間は、自らの手で食べ物を取り（作り）、命を長らえ次の世代につなげてきた。どこのだれがとった（作った）のかわからない食物を金銭と引き換えに手に入れるようになったのは、たかだかこの数百年のことにすぎない。狩猟採集の本能は、わたしたちの皮を一枚はがしたところにもまだ脈々と息づいているはずなのだ。海に潜って獲物をとり「とったどー」と雄たけびをあげるテレビ番組が人気なのも、それゆえで

漁獲体験には、狩猟本能にじかに響く強いインパクトがある

はないだろうか。

食に対する本能的な不安と食糧生産への欲求が大きな原動力に

また、現代の社会では食卓と生産現場があまりに遠く離れてしまい、どこでどうやってとれた（作られた）ものを自分が食べているのかがわからなくなっている。食に対する本能的な不安と食糧生産への欲求という、心のすきまが、農漁業体験に人びとをひきつける大きな原動力になっていることは間違いない。

その農漁業体験の中でも、とくに「とって食べる」漁業体験は感動が大きい。なにせ、はつきりと命が見えるものが相手なのだ。目の前の海の中から抜きあげられ、手の中でびちびちと動く魚介類が、やがて命を失って動かなくなり、さばかれ血を流し食卓に供されるまでの一部始終は、自らの命とのつながりという食の本質を存分に感じさせてくれる。

さらに、海という自然を相手にして漁獲を得るさまざまな知恵や、「板子一枚下は地獄」の危険と隣り合わせの漁村の信仰などの文化に、漁師という生身の存在を通してふれることができるのも、漁村や漁業の体験ならではの魅力だ。都市漁村交流の魅力と価値は、何重にも重なった命と食の体験にあるのだ。

四．「教育」という新しいジャンルの登場

地域振興策としての教育旅行

修学旅行や体験学習など「教育」というジャンルで地域振興を目指す

さて、先述したように、二〇〇〇年ごろから都市漁村交流は新しい局面を迎えた。その特徴は、ひとつには全国的な体験型観光の流れに乗ったことであり、もうひとつは修学旅行や体験学習など「教育」という新しいジャンルで地域振興を目指すようになったことであった。

他に先駆けて教育旅行の取り組みを始めた、二つ漁村の事例を紹介しよう。

事例八・福井県若狭町三方

若狭町三方の常神、神子、小川、世久見せくみの四集落には、地区住民の組合が経営する、村張りむらぢりの大型定置網がある。ここは一九六〇年代後半から漁家民宿の経営が始まった地域でもある。しかし平成に入るところから民宿の客足は鈍り、廃業が目立ち始めた。それをカバーするために漁業体験を事業化したのが、神子地区の森下幸一さんだ。宿泊に自営の小型定置網の体験サービスをつけ集客数を上げたのだ。

やがて村張りの大型定置の船頭になったのを機に森下さんは、大型定置網での体験漁業を提案する。当時、網船は女人禁制だったために反発もあったが、粘り強く説得し漁業体験を実現。いざやってみると予想以上に事業は当たり、地区もまとまっていったという。

やがて、たまたま宿泊して漁業体験を経験した岐阜の中学校の先生から、修学旅行の申し入れが寄せられた。森下さんは「個人客相手では先が見えている、これからは団体だ」と奮起した。しかしどの民宿も保護者が同伴しない子どもの受け入れ経験がなく、百数十人の漁業体験にも二の足を踏んだ。森下さんは体制作りに奔走し、全生徒同時の網起こし見学も実現。この苦労は報われ、修学旅行を終えた中学校は大満足。翌年から口コミで申し込みの校数が増えていったという。

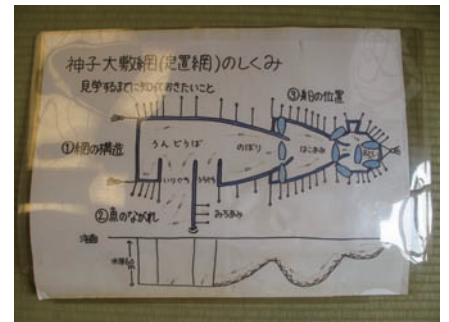
神子はこの成功を独り占めしなかった。近隣三地区にノウハウを伝え、教育旅行の事務局を若狭三方五湖観光協会に託したのだ。やがて四地区共通で①大型定置網漁体験、②干物作り体験、③各民宿での漁師との語り、④オプション（釣りやカヤックなど）という体験メニューが整う。数の力で教育旅行受け入れは盤石になり、四地区の教育旅行受け入れ数は年間五、六千人にものぼるようになる。観光協会では「漁業体験と教育旅行がなかったら、この地域の観光業はおそろしい状況になっていた」と話す。神子の漁家民宿は、二四戸のうち一四戸が教育旅行のおかげで残っている。

最近では競合する地域が増え、また教育旅行は季節が集中することもあり、観光協会では五年ほど前からインバウンドに活路を見出そうと海外への営業を展開。台湾などから修学旅行受け入れに成功した。さらに昨年から今年にかけては、台湾や香港からの一般客の漁家民宿客が急増。お目当ては定置網漁体験で、若狭三方地域の体験交流事業は新たな時代を迎えている。

世久美地区では、見学デッキを設けた漁業体験仕様の漁船を水産業の事業で新造した。ふだんの操業で使用されている



漁港に戻ってから、とれた魚をさわる体験や担当漁師による“お魚解説”がある



漁家民宿での「語らい」では、定置網漁の仕組みをイラスト教材でわかりやすく紹介している



修学旅行を終えた子どもたちを
集落総出で見送る

事例九・長崎県松浦市青島

松浦市の一般社団法人まつうら党交流公社は、教育旅行で地域振興を図ろうと立ち上げられた。現在、松浦市、佐世保市、平戸市の二三集落が協議会を作り、公社のコーディネートで教育旅行を受け入れている。民泊登録は五二〇軒、農林漁業の体験は八〇種、一日二千人を受け入れる体制を確立し、年間売上は四億円にのぼる。

この桁外れの事業を築いたのが公社の筒井雅浩さんらだ。二〇〇一年に筒井さんたちは松浦市の助成を受け、官民協働の体験型旅行の協議会を設立した。公社の前身だ。その事業化に当たり二つの方針が掲げられた。ひとつは広域連携だ。「小さな行政単位で産業は興せない」と、行政の枠を越えて受け入れの地区協議会を整えていった。

もうひとつの方針が、本物の海のみならず体験だ。「全国から集客するには、事例の少ない海の体験で勝負する」という戦略を立て、「作り物ではない生業体験が心をゆさぶる」と、本操業に近い漁業体験と漁家民泊を売りにした。

二〇〇三年、初めての修学旅行の受け入れ地は、松浦市から船で二〇分、人口二八〇人八〇世帯の漁業の島、青島だった。筒井さんが相談したのは、のちに青島の協議会事務局を担う川上一代子さん。漁師の夫を亡くした後、島で唯一の民宿を開き四人の子どもを育て上げた肝っ玉母さんだ。筒井さんからの相談を「青



川上一代子さん。修学旅行生にとって「島のお母さん」のような存在だ



青島では、伝統的な行事や行事食が今も息づいている



海女さんも漁家民泊を受け入れる。食事は各家の特徴を生かしたものを用意するので、海女さんの家ではアワビが食卓にのぼるといふ

島は今のままじゃいかんねー」とよく話している友人の漁師たちにつないだ。

すると「国の近代化資金で漁船を造ったが漁業経営は不安定。体験を受け入れたら返済の当てができる」と、二〇人の漁師が手をあげた。しかし一方で「外から大勢の人を入れたら島が壊れる」という反発もあった。川上さんたちは一軒ずつ説明をして回り、民泊受け入れは尻込みする漁師の奥さんたちに「一回だけでいいから」と頼みこんだ。受け入れが決まると、筒井さんらがコーディネート組織として力をふるった。届出や許可を整えるほか、衛生や安全講習、生徒との接し方の研修、体験のインストラクター講習などを徹底した。

こうして迎えた埼玉の私立高校の修学旅行は大成功だった。「初日には不貞腐れていた眉ピアスの男の子が、滞在中にどんどん変わって、最終日の港でのお別れ会で『青島サイコー！』と叫んだとたん、みんな涙ぼろぼろになりました」と川上さん。漁業体験でとった魚を食べながら「今まで食べてきたものは何だったのか」と考え込む生徒の様子にも心動かされたという。

「二回だけ」と民泊を引き受けた人たちも、生徒たちの感動する様子に自信をつけ「次の学校はいつ来るの？」と催促するほど積極的になり、漁業体験と民泊はすっかり島に定着。今や年間三〇〇〇人が訪れる島の新たな産業になり、その活気はUターン者も引き寄せているという。

教育旅行の受け入れによって地域振興に成功

この二つの事例は、漁村における教育旅行のパイオニア的な存在だ。若狭町三方は民宿への誘客を目的に始めた体験漁業が、やがて偶然の出会いで海なし県の学校のニーズにつながり、事業化への道へと進んだ事例だ。一方の松浦は、最初から教育旅行による地域振興を目的に掲げ、海の体験＋漁家民泊の仕組みをゼロから作り上げている。両者の成り立ちは異なるが、いずれも教育旅行の受け入れによって地域振興に成功している点では共通している。

事例五の高知県上ノ加江の交流事業も、当初の対象は個人観光客だったが、高知市内の学校の日帰り体験学習の誘致により経営を安定させている。沖縄では海のレジャーや民泊と組み合わせた教育旅行はとくに数が多く、受け入れ地域の林立で近年では価格競争が起こっているという話さえ耳にする。

かつての宴会の団体客にかわる学校という団体客を対象に、都市漁村交流は大きく姿を変えつつある。これは今後、三方のようにインバウンドの方向にも進んでいくことが予想される。

漁村の高い教育力

では、農山漁村への教育旅行がさかんになったのはなぜだろう。農山漁村の側にとっては、経済効果や生きがい作りなどの地域振興がおもな目的だが、一方の学校の側が、

農村や漁村のもつ教育力を高く評価しているからに他ならない。

二〇〇五年度に文部科学省が実施した「青少年の自然体験活動の充実に向けて…青少年の都市と農山漁村の交流活動推進に関する調査研究事業」（平成一七年度）の報告書では、宿泊を伴う自然体験の教育効果には、（１）達成動機の向上（２）有能感の向上（３）自律心の向上（４）他者受容感・凝集性の向上（５）自己決定感の向上（６）自然意識・感性の向上（７）生きる力の向上（８）正義感・道徳心の向上、などがあるとし、その上で青少年の都市農山漁村交流によって期待される効果を、

青少年の都市農山漁村交流によって期待される効果

- ・ 日本文化の伝承…日本的なものの考え方や暮らし方、いわば日本文化を受け継ぐ機会が失われている。農山漁村地域で文化の意味を直接肌で感じつつ理解できる農林漁業体験によって、日本文化を身につけることができる。
- ・ 広い世界観を得る…都市部と農山漁村の違いの体験は、将来、世界のグローバル化とローカリズムのバランスと融合を考える上で重要な体験となる。
- ・ 都市と農山漁村の共生…都市と農山漁村が深く関わり合いつながりあって互いの暮らしが成り立っていること、地域に住むひとびとや生き物、自然環境の共生で世界が成り立っていることを実感できる。
- ・ 生きることの意味の実感…「生きることの意味や実感」が、都市部の子どもたちばかりか、農山漁村の子どもたちからも失われつつある。農山漁村の暮らしの成り立ちを体験することで、生き物やいのちの価値を実感できる。

などと、まとめている。

つまり、たとえば松浦市青島を訪れた眉ピアスの不貞腐れた男の子たちが、二泊三日の漁業体験や民泊での生活体験によってみるみる変わっていく、すなおに「青島サイコー！」と叫ぶまでになる、そんな高い教育力が漁村にはあるのだ。青島には、修学旅行で島を訪れた子どもたちが大人になり親になって子どもを連れて再びやってくるという。他の農山漁村でも、同じような話は多く聞くことができる。

教育旅行の受け入れは一見、農山漁村の地域振興策のように見えながら、じつところ教育現場からのニーズに応え都会の子どもの教育に力を発揮することで、日本社会の発展にも大きく寄与している。生産金額では計り切れない大きな社会的価値が、都市漁村交流にはあるのだ。

水産業・漁村の多面的機能

ここで水産行政における交流事業の位置づけを確認しておきたい。水産基本法(二〇〇四年)には、次のような条文が盛り込まれている。

(都市と漁村の交流等)

第三十一条 国は、国民の水産業及び漁村に対する理解と関心を深めるとともに、

健康的でゆとりのある生活に資するため、都市と漁村との間の交流の促進、遊漁船業の適正化その他必要な施策を講ずるものとする。

(多面的機能に関する施策の充実)

第三十二条 国は、水産業及び漁村が国民生活及び国民経済の安定に果たす役割に関する国民の理解と関心を深めるとともに、水産業及び漁村の有する水産物の供給の機能以外の多面にわたる機能が将来にわたって適切かつ十分に発揮されるようにするため、必要な施策を講ずるものとする。

水産基本法に基づく「水産基本計画」(二〇一二年三月)では、四つの基本方針、①東日本大震災からの復興、②資源管理やつくり育てる漁業による水産資源のフル活用、③「安全・安心」「品質」などの消費者の関心に応え得る水産物の供給や食育の推進による消費拡大、④安全で活力のある漁村づくり、を掲げる。

そのうち④の具体的な内容は、「景観・産物・行事等、漁村のもつ優れた特性を活かして、希望を持って定住できる漁村地域を実現していくことが重要」「機能的で災害に強い安全な漁港・漁村づくりを進めるとともに、水産業・漁業の多面的機能発揮に向けた取組を推進」とある。

では、その「水産業・漁業の多面的機能」とは何かというと、環境保全機能、生態系保全機能、生命財産保全機能などと並んで「保養・交流・教育機能」があげられ、「新

教育現場からのニーズに応え都会の子どもの教育に力を発揮し、日本社会の発展に大きく寄与

鮮な水産物の直売、漁業体験による交流、漁村における環境学習」が具体例として示されているのだ。

この農山漁村や農林漁業がもつ「多面的機能」という考え方は、水産基本法の五年前に「食料・農業・農村基本法」（一九九九年）で打ち出された。食糧生産という「本来的な機能」だけでなく、農業や農村には環境保全、洪水や土砂崩壊防止、水源涵養、生物多様性保全、景観や文化の継承、安らぎ空間の提供などの多面的機能があることを評価し、戸別所得補償などで農業経営を国が支援しようとするものだ。

水産業でも一昨年から今年度までの三年間、「水産多面的機能発揮対策」という国の事業が実施されているが、これまでにはなかった「漁村文化の継承」という分野に初めて国の交付金もたらされた点で、画期的なものであった。各地の漁村は外に向かつて扉を開き、魚食普及、教育啓発、伝統文化の伝承にかかわるさまざまな活動が行われた。この活動で漁村は自らの価値を新たに見出し、市民との交流によって漁村や漁業を理解し支援する人びとを新しく得ることになった。

しかし二年目の秋のレビューで、その価値が十分に理解されないままあえなく「漁村文化の継承」の分野は消滅に追いやられた。市民と漁村との交流の機会が狭められたことは、漁村の振興と存続にとって大きな損失になったというほかない。

五. 「食べさせる」から「学ばせる」プログラムへ

さて、この一〇年ほどの間にさかんに行われるようになった学校の体験学習という新しい交流事業は、それまでの船に乗せてとれた魚介を食べさせる純粋な体験だけではなく、「教育的な学習プログラム」の需要を生み出した。若狭町三方では各漁家民宿で定置網体験の前夜に、「漁師さんとの語り」として学習要素の強いプログラムを組み込んでいる。ここでは、定置網漁の仕組みをはじめ、地域の漁業や漁場、漁村のくらしや民俗の話題が語られる。

また体験型観光でも、漁業者の説明やガイドなど何らかの「プログラム要素」が求められるようになっていく。新たな交流事業は「プログラム化」がその大きな特徴なのだ。

プログラム化の点でも優れた二つの事例を紹介しよう。

事例一〇…茨城県大洗町

大洗町漁協の青年部にあたる大洗町漁業研究会は、三〇歳代を中心にした二一人で構成するが、数年前からシラス船びき網漁で漁業体験の事業を始めた。漁協では一〇年ほど前から地元小学校の体験学習を行ってきたが、数年前に漁協役員

これまでにはなかった「漁村文化の継承」という分野

新たな交流事業は「プログラム化」が大きな特徴

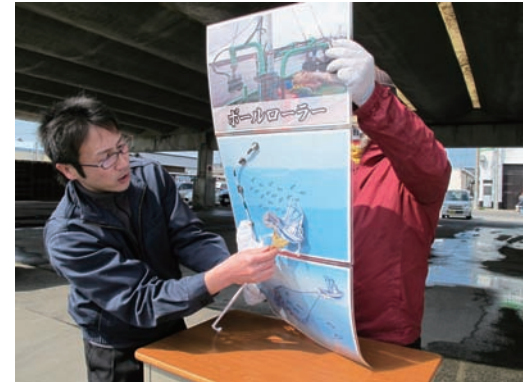
から若手にバトンタッチ。これを機に「シラス漁の経営が厳しくなっている。観光漁業の道も模索しよう」と、若い漁師たちが学習プログラムを充実させ、ビジネス化を目指している。

じつは、このプログラムの完成度がスバ抜けているのだ。地元小学校の反応を見ながらすべて自分たちで練り上げたそうで、プロが関与していないプログラムとしては日本一の質の高さだといってもいい。二時間ほどのプログラムは、岸壁でのレクチャーでスタートする。船びき網漁の仕組みや大洗の漁業の紹介、近海の特徴から旬の魚や食べ方まで、紙芝居のようなパネルを使って紹介。巧みな話術も光る。とくに漁法の話は詳しく、漁具の工夫や鮮度を保つ苦労、漁師間のしのぎ合いなど、リアルな話に聞く者は引き込まれる。次は、岸壁に広げられた中古の網に、魚になった参加者が入って漁獲される体験だ。子どもにも大人にも「魚の気持ちがる」と大人気だそうだ。

いよいよ乗船すると、操舵室の計器類の説明が始まる。数隻が出る小学校の授業では、子どもにも無線通信の体験もさせるという。「子どもたちの正直な反応に鍛えられました。経験から学んだことはかりです」と研究会メンバーはいう。その教育効果の高さから小学校からの要望が強く、今では町の予算で町内全小学校の五年生が体験学習を行っている。

現在、体験の実施は小学校の授業のほか、観光協会や漁協の観光イベント時で

の実施が中心だが、宿泊施設とのパッケージプランや近くにある県の体験交流施設の宿泊者の誘致も検討している。



工夫をこらした手作り教材で、楽しくわかりやすく漁法を解説



「お魚とっちゃんぞー」。本物の網をくぐる体験は大人気だ



網を上げる瞬間を参加者が見守る。スタッフ3人体制で安全管理も手厚い

事例一…三重県桑名市赤須賀

木曾三川の河口の桑名では、広大な汽水域と干潟が多様な生き物を育み、さまざまな漁業が営まれてきた。しかし開発によりほとんどの漁業が消滅。一九七四年に三千トンあったハマグリ漁も四年後に一〇〇トン以下に激減し、やがて幻に。しかし漁師たちは「桑名の代名詞を絶やせない」と、四〇年にわたり稚貝の生産と放流を続け、人工干潟の造成も実現。一〇年ほど前からハマグリは年間一〇〇トンほどに漁獲が回復し、若い漁業者が三〇人も増えた。

その後継者たち赤須賀漁協青壮年部研究会では「せっかくだ戻りつつある資源を守らねば」と活動している。その活動は、稚貝生産と放流、密漁監視、シジミの加工販売などと幅広いが、とくに大事にしているのが「赤須賀の漁業を広く伝えること」、「つまり教育だ。

「ハマグリとシジミに頼る赤須賀で漁業を続けるには、資源管理、密漁対策、消費者の理解が必須。その環境づくりには、漁師が顔を合わせて現状を伝えることが最も効果的」と研究会では考えている。中でも次世代を担う子どもに伝えることを重視して、学校向けの学習プログラムを充実させてきた。

体験学習のプログラムは二パターンある。多いのは市内二二小学校すべての三年生が漁港を訪れる社会科見学だ。まず手作りのパネル資料を見せながら、赤須賀の漁業や漁法について概説する。ハマグリ漁獲の変化にふれ、稚苗生産や漁



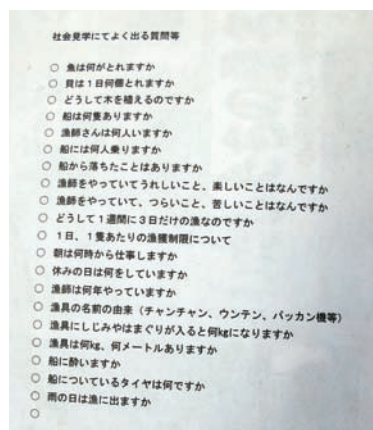
解説の資料を見せる
伊藤翔太会長



シジミ漁の漁法を見学させる漁港。この岸壁でもシジミがとれる



漁協の建物に併設した資料館。資源回復の取り組みについて詳細に調べ、社会科見学でも活用されている



小学生からのよくある質問をきちんとまとめ、対応には抜かりがない

獲制限などの資源管理の取り組みについていねいに話す。その後、漁港の岸壁で実際にシジミの操業の様子を見せ体験もさせている。「体験よりもお話が多いので、つまらないと印象に残らない」とメンバーは必死で、話術を磨くことも怠らない。「子どもの表情を見て、飽きたなと思ったらクイズを出したり話題を変えたり工夫しています」と、毎日が真剣勝負だ。

もうひとつのパターンは、地域の海の教育にとくに熱心な二校の五年生が対象。漁船で海に出て操業を見学させ、焼きハマグリとシジミ汁の試食もつける。実費はすべて学校の負担だ。他にも、漁協にいちばん近い小学生によるハマグリと稚貝放流を行うほか、一般向けには漁業祭りで資源管理についての解説も行っている。

小学校の学習受け入れは、校数が多く時期も重なるために大変な労力がある。しかし「継続して伝えることが大事。漁場を守り赤須賀の漁業と漁村を次世代に手渡すのが使命」という意気込みが、彼らの活動を支えている。

大洗町の若い漁業者たちの取り組みは、まさにプログラムが商品になっている。シラス漁の漁獲は、時期によってはアユの稚魚やシラウオなども混じるもののシラスが主。多彩な海の生き物が水揚げされる漁法に比べると、正直にいうと操業そのものはどちらかというと地味だ。

それを、パネルを使ったわかりやすい解説やクイズ、漁網をくぐる体験や漁船の解説などの学習要素で十二分にふくらませ、参加者の心を引きつけてしまう。これぞプログラムの力の勝利だ。

プログラムの力すなわち見せ方ひとつで、利用されていない観光資源の原石はきらめく宝石となる

これまで、漁村の観光資源は「海に出て、とって食べさせる」体験そのものの魅力に頼り切っていたように思う。しかし漁村には、いまだ見出だされず利用されていない観光資源の原石が山のように埋もれている。プログラムの力すなわち見せ方ひとつで、その原石はきらめく宝石となるのだ。

さらに現在の交流事業は、資源の枯渇など漁業の苦しい現状をカバーしようとする側面がある。獲れないのなら「たくさん食べさせる」体験から「少し食べさせて、たくさん学ばせ満足させる」体験へのシフトは、至極当然の理にかなった成り行きだろう。

芦北の打瀬船の楠山さんがいう「団体客が戻ってこない。漁獲が細ってお客に十分食べさせられない」という悩みも、根本から考え方を転換する選択もありかもしれない。食べきれないほどの料理を並べる「食べさせる」観光から、巨大な木造帆船によ

る環境にやさしい打瀬網漁という「日本最後の文化遺産」の面を押し出すプログラムによって、新たな局面が開けないともかぎらない。

集客が大きく減ってしまった徳島県中林の観光地びき網も、プログラムの視点で見ると工夫の余地がある。網には活アナゴや養殖マダイがあらかじめ仕込んであるのだが、実際にその海にいる雑魚もかかる。しかし、もつたいないことに雑魚はあっさり捨てられている。このさまざま魚たちをちゃんと観察し、さらに何匹かは参加者が調理体験して食べるプログラムに仕立て直せば、体験の新たな価値が生まれることだろう。

プログラムを見直し、体験の新たな価値を生み出す工夫

他にも課題はある。七、八年前から保健所の指導により、それまで砂浜の休憩所で客の目の前で魚をさばっていたのが、施設内の調理場で行うことになった。調理の女性たちは「お客さんと雑談しながらさばき方や食べ方を教えていたのに、今は顔を合わせることもなくなった」と残念がる。味わいのある漁村のお母さんたちとの交流が絶たれ、体験の魅力は大きくそがれたはずだ。

他の地域でも、船上で獲れたての魚介を調理し食べることが許されなくなった例は多い。漁業体験のプログラム化のひとつの課題だといえる。

漁村に秘められた高い教育力をプログラム化によって十分に引き出し、交流事業に活かすことで、漁村の経営にはまだまだ大きな伸びしろがあるのは間違いない。

六．これからの交流事業と漁村の持続

浅い海の世界を見守る目

水産業の厳しい局面にあたり、六次産業化、未利用魚の活用、品質管理の徹底やブランド化、流通の再編成などさまざまな努力が展開されているが、体験交流事業にも厳しい局面を開く大きな可能性があることは、おわかりいただけたと思う。

漁業や漁師という生き方の多様性を広げる

その可能性の目に見えないもののひとつとしてわたしが期待しているのが、漁業や漁師という生き方の「多様性」を広げることだ。

日本の沿岸は、環境と生態系の多様性に富み、季節ごとにさまざまな魚種を対象に多彩な漁法が編み出され、世界に類を見ない多様な漁業が存在していた。そして、漁村の生活文化や民俗はその多様性の中から生まれ、海洋国ニッポンの文化の重要な一部を形作ってきた。

ところが今、生産性や資源の問題から、漁業のあり方は多様性を失いひどく単調で平板なものになりつつある。若い世代がすべからず養殖業や定置網漁など、比較的安定した水揚げがぞめる漁業に就いたとしたら、漁村に息づく技術や文化はどうなるのだろうか。また、前浜の浅い海の世界への目配りも届きにくくなってしまっている

のだろうか。これは、日本の漁業の大きな課題だとわたしは考えている。

事例一で紹介した日生だが、じつは三〇年も前に全国に先駆けてアマモの種をまき、海の世界再生に取り組んできたことでよく知られている。当時は誰も見向きもしなかったアマモ場の重要性に気づいたのは、水深五メートル前後の海で「つぼ網」と呼ばれる小型定置網漁を営む漁師たちだった。日生漁協前組合長の故・本田和士さんもつぼ網の漁師で、漁獲が減った原因をアマモの消滅と結びつけた。「一年を通して浅い海で漁をし、網の手入れで日がない一日浜にいるつぼ網の漁師だからこそ、海の世界の変化に気づくことができたんや」と、本田さんは生前に聞かせてくれた。そして、「沖の漁業や養殖の漁師には、それが実感としてわからない」とも話していた。

日生では今、カキ養殖が水揚げ高の八割以上を占めている。これまでの漁船漁業とはけた違いの水揚げ高を安定的に上げるカキ養殖によって、日生の漁業は発展している。その一方で、つぼ網漁は漁獲も魚価も下がり、漁師は高齢化の一途をたどってきた。底びき網漁の経営体も減り、瀬戸内海の小魚文化を代表する「五味の市」の一〇年後はどうなるのだろうか。

アマモの種まきは現在も漁協をあげて熱心に取り組まれ、地元小学校や市民の環境団体との連携も進み、日本を代表する海の世界活動の大きなうねりとなっている。しかし、本田さんが語ったような、実感をもって海の世界と漁業を結びつけ環境を見守る漁師は、姿を消してしまうのだろうか……。そう心配していたら、昨年と今年、カ

「日がない一日浜にいるつぼ網の漁師だからこそ、海の世界の変化に気づくことができたんや」

キ養殖の合間につぼ網漁をする二〇歳代の後継者が二人生まれたそうだ。

日生漁協の天倉辰己専務は「若い者に『これからは沿岸漁業が大事だ、つぼ網をやれ、やれ』とずっといつてきたんですよ」と、若手の参入にうれしそうな笑顔を見せる。現在、つぼ網漁師は二〇代と四〇代の二人ずつを含む七経営体があるそうだ。

ただ課題は、藻場の多様な魚にいかん値段をつけるかだという。これはわたしの勝手な考えだが、アマモ場の環境保全とつぼ網を結びつける活動、つまり漁業体験やつぼ網を題材にした教育プログラムが有効なのではないだろうか。価値を消費者に知ってもらうことで、価格も消費も支えてもらう。これぞ、漁村の交流事業の真価といえるだろう。

漁業や漁業者の多様性が未来を拓く

交流をキーワードに漁業や漁師という生き方の多様性を広げること。それが、これからの漁村コミュニティや漁村文化の持続、海の自然環境の保全、ひいては日本の未来を豊かにすることにつながるのではないだろうか。

ここ数年、都市から農村に若い世代が移り住む動きが目立つ。彼らが新天地に求めるのは、都会にはない人間らしい豊かな暮らし方や働き方だ。「半農半X」という言葉が生まれたように、農業だけではなくさまざまな技能を活かした別の仕事からも収

多業や起業で地域の活性化を目指す

入を得る多業や、地域の資源を活かした起業で地域の活性化を目指す生き方もさまざまに生まれている。これまでの農村にはなかった、新しい多様な生き方だ。

同じような生き方は、漁村でも可能なのではないだろうか。三重県鳥羽市の答志島では、大阪などから漁家に入ったお嫁さんたちが、島の漁村文化にふれて観光資源としての価値を発見。島歩きのガイドツアーや磯遊びの自然体験などを行う「島の旅社」を立ち上げ、交流事業で外から人呼び込んでいる。

福井県小浜市の矢代という小さな漁村では、ワカメ養殖と民宿、遊漁船を営む漁家の後継者が、地域づくりの市民団体や地元海洋系高校の生徒たちと一緒に、前浜の海の環境保全と漁村の文化を伝承する「うまし漁村の会」を二年前に発足させた。この後継者は生来船酔いがひどく、父親の遊漁船を継ぐことを断念。それでも海が好きで漁業を生業にしたいと、伝統食の「へしこ」作り体験、ワカメの養殖体験のほか、刺し網やかご漁の漁業体験と藻場の環境保全を結びつけた体験学習のプログラム化を市民団体とともに模索中だ。

漁獲高を競うのとは別のしかし十分に価値のある生き方

モニターツアーの参加者の評価は高く、一般市民が体験プログラムを通して海の自然や漁村、魚食文化に親しめる機会として歓迎されている。人と海をつなぐ役割を担うこの若者の生き方は、漁獲高を競うのとは別のしかし十分に価値のある生き方である。漁師という生き方の多様性は、海にかかわる人びとの多様性にもつながるのだ。各地で行われている漁業体験や漁家民泊の事業だが、高齢化で担い手が減ることが

懸念されている。農業の分野では、定年でリタイアした層を積極的に取り込む動きもあるが、漁業の場合は労働の厳しさや安全管理面のハードルが高いことなどから、直ぐには進まないかもしれない。しかし、漁業や漁村の観光資源を活用した教育プログラムの提供者（インタープリター）としての、若い後継者や移住者あるいは女性たちの新しい働き方生き方に、持続可能な漁村のカギが秘められているように思われる。

「交流」がもつ意味

最後に、体験交流事業の「交流」がもつ意味を考えて終わりにしたい。

農業とは違い一般の人が近づきにくい漁村や漁業だが、交流事業によって外に扉を開くことで、漁村や漁業、海の環境に多くの人びとがふれ理解し、さらに漁村の人との出会いからその土地に親しみを覚えるという作用をもたらした。

なつかしみ「気にかける」人たちを増やすという大きな効果

修学旅行で青島に行き、後に自分の子どもを連れて再び島を訪れる元生徒にとつて、青島はまるで自分の田舎のような感覚に違いない。交流事業は、島に経済や精神的な恩恵だけでなく、青島と島人をなつかしみ「気にかける」人たちを増やすという大きな効果も生み出しているのだ。

ボランティアが訪れた被災地の漁村でも同じことがいえる。南三陸町歌津の高橋さんのネットショップでワカメを買うのは、ボランティアや漁業体験で高橋さんと顔を

合わせた人たちだ。実際に歌津を訪れ、その地で生きる人びとと交流したことで、歌津をなつかしく思い出し、浜の将来を一緒に支えたいという気持ちを寄せているのだ。

漁師が努力している資源管理や環境保全の取り組みを市民に理解してもらい、密漁を防ぎ一緒に海を守ってもらおうと働きかけているのが、三重の赤須賀の後継者たちだ。「顔を合わせた交流」が理解のためには重要だと若い漁師たちは考え、だからこそ市内全小学校の社会科見学に力を注いでいるのだ。

福井県小浜の若い漁師と一緒に活動している人びとも、海や漁村文化の体験を楽しみ、環境保全にも貢献していることに達成感を見出し、喜びを感じている。

わたしは、各漁協に必ず一人は「交流担当」の職員を置いてはどうかと考えている。漁村の風通しをよくし外の人びとの力も借りて地域のにぎわいを生み出し、漁業の振興、海辺の資源や環境の保全を目指す「交流」は、これからの漁村のあり方のキーワードになるだろう。

各漁協に必ず一人の「交流担当」職員を置いてはどうかと考える

後記

これまで全国五〇か所以上の地域で、漁業体験を中心とした都市漁村交流の事例を訪ね歩き、できるかぎり実際に体験しつつ話を聞いてきた。

きっかけは、趣味が高じて海辺の自然体験に係わるうち、「自然体験だけでは海の理解は足りない。海とともに生きる漁村の生業体験が不可欠だ」と痛感したこと。実

際に体験してみると、すっかりその魅力にはまってしまった。また、漁村でふれあう人たちが漁村独特の風俗やたずまいにも強く心ひかれたのだ。

そのうちに、ひとつの興味がわいてきた。農業分野の仕事で交流事業による地域おこしの取材を重ねてきたが、「同じ第一次産業の漁業ではどうなのだろう?」という疑問だ。こうして、別の出張のついでに足をのばすなど経費をやり繰りしながら、各地の漁業体験を見て歩いてきたのだが、これが地域によって事情がさまざまでじつに面白い。数多く調べるうちに、世の中の流れがその背景にくつきりと浮かび上がってくるのを感じた。

時代の変化はおそろしく速く刺激的だ。数年前の事例が別のコンセプトや新たな人の参加で大化けしていたり、あるいはとても魅力的な事業が消滅していったり、またこんなやり方もあったのかと驚くような事例と出会ったり。体験交流事業はまさに、人と人の「交流」から生まれる生き物なのだ。

来年の夏前を目標に、都市漁村交流について書籍にまとめようと計画している。「うちはこんなことをやっています」「こんな面白い体験がありますよ」「最近こんな動きが気になる」などの情報がありましたら、ぜひともお知らせいただけますと幸いです。

参考文献・資料一覧

二〇一三年漁業センサス

http://www.maff.go.jp/j/tokai/census/fc/2013/pdf/gyocen_13_zentai_151026.pdf

NPO法人安心院グリーンツーリズム研究会HP

<http://www.ajimu-gt.jp/>

農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律（農山漁村余暇法）

一九九四年施行、二〇〇五年十二月に改正法施行

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/yokaho.html

日生漁業協同組合HP

<http://www.hinase.net/sokobiki.html>

とくしまグリーン・ツーリズムHP「地引き網体験 中林漁協」

<http://www.pref.tokushima.jp/green/docs/2014032000097/>

南阿波よくばり体験推進協議会HP

<http://www.minamiawawa.info/top/top.html>

芦北町観光協会HP

<http://ashikita-kankou.com/utase/>

田尻漁業協同組合・田尻海洋交流センターHP

<http://www.tajiriport.com/gyogyoutaiken.html>

上ノ加江漁業協同組合HPブログ

<http://kaminokaegyokyo.blog.fc2.com/>

若狭三方五湖観光協会HP

<http://www.wakasa-mikatagoko.jp/>

松浦党の里ほんなもん体験HP

<http://www.honmono-taiken.jp/>

平成十七年度報告書「青少年の自然体験活動の充実に向けて―青少年の都市と農山

漁村の交流活動推進に関する調査研究事業」、NPO法人自然体験活動推進協議会、

二〇〇六年

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/taiken/07021609.htm

水産基本法、二〇〇四年

http://www.jfamaff.go.jp/j/policy/kihon_keikaku/aramasi/kihonhou.html

水産基本計画、二〇一二年三月

http://www.jfamaff.go.jp/j/policy/kihon_keikaku/

大浦佳代「海に種まくひとびと―二五年間に七千万粒 vol1～3」、EICネット生

物多様性特集：生物多様性と現場をつなぐ事例集・事例3

http://www.eic.or.jp/library/bio/case/c3_1.html

大浦佳代「水産振興における体験プログラムに関する研究」、東京海洋大学修士学位論文、二〇一二年

宮崎猛「グリーン・ツーリズムによる農村の地域経営とライフスタイルの転換」、宮

崎猛編『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム―地域経営／体験重視

／都市農村交流』、昭和堂、二〇〇六年

多方一成『スローライフ、スローフードとグリーン・ツーリズム』、東海大学出版会、

二〇〇六年

青木辰司『転換するグリーン・ツーリズム―広域連携と自立を目指して』、学芸出版社、

二〇一〇年

小野征一郎「総論 漁村地域における交流と連携」、『漁村地域における交流と連携―

最終報告』、財団法人東京水産振興会、二〇〇四年

妻小波「漁村地域資源の利用と管理―海業（うみぎょう）振興の視点から」、『漁村地

域における交流と連携―最終報告』、財団法人東京水産振興会、二〇〇四年

妻小波『海業の時代（シリーズ地域の再生二九巻）』、農山漁村文化協会、二〇一三年

鬼頭秀一『自然保護を問い直す―環境倫理とネットワーク』、ちくま新書〇六八、筑

摩書房、一九九六年

西村仁志「アメリカにおける自然学校の展開と日本への影響について」、『同志社政策

科学研究』10(1)、二〇〇六年

大浦佳代「『里海の世界』と漁村のくらし」、日本水産学会誌80(1)、二〇一四年

大浦佳代「漁村に根づく相互扶助の精神―宮城県旧歌津町の「契約会」を事例に」季刊「にじ」二〇一三年秋号、社団法人JIC総研

大浦佳代「ブルーツリーズムの挑戦と課題」、季刊「漁協(くみあい)」一五三号、全国漁業協同組合連合会、二〇一四年

大浦佳代「漁業と観光の共存共栄」、季刊「漁協(くみあい)」一五三号、全国漁業協同組合連合会、二〇一四年

大浦佳代「岩手県・宮城県の被災漁村における交流事業」、『漁業・水産業における東日本大震災被害と復興に関する調査研究―平成二十六年年度事業報告―』、一般財団法人東京水産振興会、二〇一五年

時事余聞

◇：企業間の争いはまさに戦国時代である。能力ある者はトップ企業に立ち業界に君臨できる。なき者は跡形もなく消えてゆく。これがビジネス社会の偽らざる

実態である。豊臣秀吉が戦国時代に覇をとえられたのは優れた軍師を持ったからである。一人はNHKの大河ドラマに登場した黒田官兵衛、それに竹中半兵衛、また官僚として活躍した石田三成である。

◇：官兵衛は小大名ながら播磨の家老の家に生まれ、織田信長と毛利輝元の勢力争いに巻き込まれながら主家を織田方に帰順させる。得意技は調略と交渉力である。官兵衛は秀吉が何を考え何を目指しているかを熟知していた。そしていま一つ地域の政治情勢も熟知していた。だから秀吉の弁舌に引き寄せられ織田方につく勢力も増えた。主家の小寺政職を説き伏せ織田方に身を寄せさせたのもその一例である。

◇：天下人になるきつかけを作ったのは明智光秀の本能寺の変である。光秀の計算だと備中高松城で毛利と

戦っていた秀吉がそんなに早く京に引き返せるとは思えなかった。この采配を振ったのは官兵衛である。しかも、直後の山崎の戦は秀吉の将来を決める。功を立てれば大名にも足軽でも一軍の将にもなれる、という噂を流し、兵士を奮い立たせた。

◇：竹中半兵衛は美濃の斎藤家の臣の家に生まれ、官兵衛より早く秀吉に仕えた。軍略の才能に恵まれ、三木城の兵糧攻めなど多くの戦いの指揮をとった。その采配振りは敵味方共に知れ渡っていた。半兵衛は秀吉の腹を十二分に読み取り、緻密な戦略と具体的計画を立てる。その実現までのプロセスまで描く。悉く秀吉の意にかなない重用される。

◇：石田三成は官僚として秀吉を支え最後に秀吉の五奉行の一人として手腕を振るい、三成が秀吉に買われたのは諫言にあつた。その直言は息子・秀頼に気をとられても秀吉の耳を傾けるまでにはいかなかった。近江商人の血を引いたせいか数字には明るかった。しかし、家康との戦いでは、家康は専務、三成は秘書課長格。勝敗はおのずと明らかだった。(K)

編集後記

都市と漁村の交流事業（ブルーツーリズム）は一大転機を迎えているという。各地の漁村の取り組みは地域の特性や背景によって実に多彩だ。本稿では体験交流に訪れる人びとの「ニーズ」にも光を当て、漁村ならではの魅力や価値にも迫っていただいた。全国で漁業体験を行った漁協数は二三四、年間十二万六千人が参加し、漁で楽しみ海の環境を守るうとしている人びとも増えている。漁村のあり方の今後のキーワードともいえる。筆者に心から御礼申し上げます。

「水産振興」 第五七六号

平成二十七年十二月一日発行

(非売品)

編集兼
発行人 井上恒夫

発行所 〒104-0055 東京都中央区豊海町五番一号
豊海センタービル七階

豊海センタービル七階

一般財団法人 東京水産振興会

電話 ☎ 三五三三八一一

FAX ☎ 三五三三八二一六

印刷所 (株)連合印刷センター

(本稿記事の無断転載を禁じます)

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL <http://www.suisan-shinkou.or.jp/>

平成二十七年十二月一日発行（毎月一回一日発行）五七六号（第四十九卷十二号）